

山木先生の投稿論文が獣医学雑誌「The Journal of Veterinary Medical Science」に掲載されました。

Long-term follow-up study after administration of a canine interferon- α preparation for feline gingivitis

Seiya YAMAKI, Hisae HACHIMURA, Masao OGAWA, Shinya KANEGAE, Taiki SUGIMOTO and Akiteru AMIMOTO

*J. Vet. Med. Sci.*82(2): 232-236, 2020



犬ではイヌインターフェロン α (インターベリー α)の口腔内投与により歯肉炎が軽減されることが確認されていましたが、猫での効果は確認されていませんでした。そこで本研究では、インターベリー α を猫の歯肉炎に対して使用し、12ヵ月間観察・評価することで、その効果の程度と持続時間について検証しました。

インターベリー α を投与した猫では犬に比べると効果が弱いものの、歯肉炎と口臭の軽減が認められました。歯肉炎の軽減効果はインターベリー α 投与開始後から徐々にみられ、3ヵ月時点で最も効果を示しましたが、その後は徐々に症状が進行し、12ヵ月時点では開始時点に近い歯肉状態まで戻りました。一方、インターベリー α を投与していない猫では歯肉炎と口臭の軽減はみられず、症状は次第に進行し、12ヵ月後には明らかな悪化が認められました。結果から、歯周病に対する予防的なケアが重要視される現状において、インターベリー α は猫においても口腔衛生管理の一手段として有用な薬剤であると考えられました。

※同著者による犬におけるインターベリー α の効果検証は、日本獣医学雑誌に掲載されています。(犬の歯肉炎に対するイヌインターフェロン α 製剤投与後の長期経過観察, 日獣会誌, 70, 589-593, 2017)

宏和先生の投稿論文が獣医学雑誌「American Journal of Veterinary Research」に掲載されました。

Evaluation of recovery of limb function by use of force plate gait analysis after tibial plateau leveling osteotomy for management of dogs with unilateral cranial cruciate ligament rupture

Hirokazu Amimoto, Tetsuaki Koreeda, Naomi Wada

*Am J Vet Res.*80(5): 461-468, 2019



この研究は片側性前十字靭帯断裂罹患症例の治療前後における変化をフォースプレートを用いて力学的解析をした研究です。この研究は私が以前勤めていた藤井寺動物病院で行ったものです。

フォースプレートはあまり聞きなれない言葉ですが、この機械は動物の四肢に歩くときにどのくらい力がかかっているかを数値化できる特殊な検査機器です。これは整形外科領域では手術の有効性を客観的に判断できるため、近年ではフォースプレートを用いた術後評価に関する報告が多くなっています。

この研究では片側の後肢が痛みにより足が使えなくなる（体を支える、加速または減速）と反対側（正常な後肢）への負担が増加することが示されました。また、犬は四足歩行をするためこの影響は後肢にとどまらず前肢のバランスに影響することが明らかになりました。術前に見られたこれらの変化は術後患肢の機能が回復するにつれて解消されました。また、これまでにフォースプレートを用いた研究は最大床反力（Peak vertical force : PVF）が多く評価されてきましたが、本研究ではベクトルを解析することでより詳細に足の機能を評価できることを報告しました。

宏和先生の投稿論文が獣医外科学系雑誌「Veterinary and Comparative Orthopaedics and Traumatology」に掲載されました。

Force Plate Gait Analysis and Clinical Results after Tibial Plateau Levelling Osteotomy for Cranial Cruciate Ligament Rupture in Small Breed Dogs

Hirokazu Amimoto, Tetsuaki Koreeda, Yoshiyuki Ochi, Ryota Kimura, Hideo Akiyoshi, Hidetaka Nishida, Takayoshi Miyabayashi, Brian S. Beale, Kei Hayashi, Naomi Wada

Vet Comp Orthop Traumatol. 2020 Feb 23 (Epub ahead of print)



今回投稿した論文は前回に引き続き藤井寺動物病院でフォースプレートを用いた研究です。現在の獣医整形外科では犬の前十字靭帯断裂に関する多くの研究報告がなされ、フォースプレートを用いた客観的な術後回復の機能評価の報告も増えてきています。数ある治療法の中でもTPLO（脛骨高平部水平化骨切り術）という術式は大型犬で優れた治療法の一つであることが報告されています。小型犬ではこれまでは関節外制動術という術式が一般的でしたが、近年小型犬においてもTPLOが有効であることが報告されるようになりました。しかしながら、小型犬のTPLOのこれまでの報告の大部分は治療効果を跛行スコアなどの主観的評価（獣医師や飼い主様の感覚的な評価）や合併症に関する報告でした。

これまでに小型犬のTPLOの術後回復をフォースプレートを用いて客観的に評価した報告はなく、この研究は小型犬のTPLOをフォースプレートを用いて客観的に機能回復を評価することが目的です。研究結果では術後約2カ月でほぼ正常に近い機能回復が確認され、大型犬と比較して早期に機能が回復することが明らかとなり、小型犬でもTPLOが有効な治療法の一つであることが示されました。